平成25年度重点プロジェクト事業（海外派遣研究員等旅費）報告

EASS Conference 2013（ヨーロッパスポーツ社会学会第10回大会）に参加して

北村尚浩*

はじめに

ヨーロッパスポーツ社会学会（European Association for Sociology of Sports）は，2001年に設立された比較的新しい学会である。北米スポーツ社会学会（1978年設立）や日本スポーツ社会学会（1991年設立）と比べると，その歴史の浅さが窺い知れる。スポーツの起源がヨーロッパにあることを考えると，意外でもある。学会のミッションとして，ヨーロッパにおけるスポーツの社会科学的研究を促進し，EU や欧州評議会に対して科学的な助言を行うことを掲げている。2002年にオーストリアのウィーンで第１回学会大会を開催し，2004年にポーランドのジェシュフの第2回学会大会以来，毎年学会大会を開催し，「新たな課題に直面する社会学とスポーツ（Sociology and sport in face of new challenge）」を大会テーマに掲げた第10回大会が2013年5月8日～5月11日にかけてスペイン王国コルドバ市コルドバ・コングレスセンターにおい年開催された。本稿ではその概要を報告する。

学会大会の概要

スペイン，ドイツ，イギリス，ベルギーなどヨーロッパ諸国を中心に22カ国から150人が参加した。ヨーロッパ圏外からブラジル，カナダ，日本などからの参加者も見られた。日本からは筆者のほか中山健（大阪体育大学），中村宏美（日本スポーツ振興センター）2名が参加した。

今大会では４つの Plenary Session（基調講演）が用意され，ガバナンス，ジェンダー，現象論，スポーツと健康といった異なる側面から現代におけるスポーツと社会が擁する課題について報告がなされた（表1）。

表１　基調講演

タイトル	演者
What if the Players Controlled the Game?: A Radical Solution to the Crisis in Sport Governance	Peter Donnelly（Canada）
Breaking the gender sterotypes. The path to equality in Sport	Kari Fasting（Norway）
Play as production – production as game? Towards a critical phenomenology of productivity	Henning Eichberg（Denmark）
Poor World: redressing policy failings through sociological analysis of sport and health	Tess Kay（United Kingdom）

表２　一般発表のセッションテーマ

Cultural Change	Social Exclusion
Doping	Social Policies I
Elites	Social Policies II
Events	Social Theory
Experiences and Strategies	Social Values
Gender	SOR* I Concepts and Challenges
Globalization	SOR* II Qualitative Approach
Health	SOR* III Volunteering
Identities	Spaces
Local Sport Policies	Sport Habits
London 2012	Surfing
Migration	The Body
Olympics	Youth
School	

*Sports Organization Research

一方，一般発表では表2に掲げる27セッションが開かれ，発表演題は120に上った。筆者は“Globalization”のセッションにおいて「Globalization and glocalization of judo: what's

* 鹿屋体育大学　スポーツ人文・応用社会科学系

写真１　発表の様子

difference?」の演題で，口頭発表を行った．日本発祥の武道の国際化が進む中で，それらがスポーツの一つの種目として変質し，日本国内ではスポーツ化を危惧する声が聞かれるようになった．本発表では，オリンピック種目の一つでもある柔道に着目し，そのグローバルゼーションとともに生じるグローカリゼーションの側面について日本の柔道家とドイツの柔道家との比較分析を通して検証し，その結果を報告した．主な結果は次のようである．

１．ドイツの柔道家は，運動やスポーツとしてあるいは楽しみを目的として柔道を始め，スポーツの一種目として認識している．

２．そのため，彼らが柔道を習うとによって期待する効果は，運動技能や体力を高めることであり，一方で，日本の伝統文化を習得することは期待していない．

３．期待する効果について因子分析を行ったところ，日本の柔道家だけでの分析では見られなかったフェアプレイ因子が抽出された．

日本の柔道家と比較することで（北村ら，2011：安道ら，2011），ドイツの柔道家が取り組む柔道は伝統的・文化的側面は失われ，スポーツ化されていることが明らかになった．つまり，グローバリゼーションにより国際的に広まる一方で，伝統や文化といった要素が薄まりスポーツとしての性質が濃くなるグローカリゼーションが進んだと考えられる．

おわりに

ヨーロッパスポーツ社会学会の研究誌である European　Journal for Sport and Society の科学委員（Scientific Board）に加わるよう元会長の Dr. Georg Anders（ドイツ），編集委員長（Editor-in-chief）の Dr. Siegfried Nagel（スイス）より要請を受けた。2006年の第４回大会から８年間継続して学会大会に参加し，研究成果発表を行ってきたことが評価されたと考え，喜んで拝命した。今後もヨーロッパ諸国の研究者との連携を図りつつ，我が国のスポーツ社会学を含む社会科学領域の発展に尽力したい。